

## 四 大八洲婦人部の発足（昭和二十九年）

終戦後開拓農業に取り組んだ国内の各開拓地は、いずれも環境や地理的に今まで放棄されていた社会的にもまた経済的にも条件の悪い土地柄であった。そうした恵まれない地域で食事、育児の上、開墾に開拓婦人は血みどろの生活の毎日であったように、婦人の力がどんなに開拓事業を支えてきたか知れない。

昭和二十八年頃から開拓者の営農資金の返済期を迎え、婦人の協力が一層欠くことができないので、組織的に婦人部の活動がさらに求められてきた。このような情勢から、昭和二十九年に茨城会館に開拓者婦人大会を開催し、県下の開拓地の婦人代表が参集し、婦人部の結成を議決するにいたった。開拓婦人部長に徳川幹子夫人を選任して各郡支部の婦人部も逐次に結成され、県南開拓協議会婦人部の下部組織として昭和二十九年二月に大八洲開拓農協も婦人部を発足して今日にいたっている。大八洲開拓は十年間の全面共同の生活と作業をとおして繰返し襲った水害に責められながら働くことに専念し、ほとんど開拓外に外出したことも地区外の人的交流もない婦人達であった。

そんな状況で、組織活動には当初は戸惑いを感じたにもよ



昭和50年3月16日 伊豆長岡温泉ホテル三溪園宿泊記念

らず、発足後は次第に持前の闊達さと協同の強みで怖じる気配もなく、会の運営ならびに活動が予想外に活発になっていた。

組織が実施した研修会や先進地視察等の催しには積極的に参加し、女性地位の向上、技術の習得、生活の改善にも心がけてきた。また、部内でも講習会の開催、婦人学級と称して料理、生け花、着付け、栄養保健等を農閑期に開講し、満洲開拓以来十数年間の空白を少しでも取り戻したいと婦人達は熱心に受講した。二年に一回行っている部員旅行には、持前の陽気な気性に輪をかけての女性同志の気軽さに会話は弾み、唄や踊りに興じ、バスの中でも旅館でもおおいに盛り上がった懇親振りは毎回のことであった。

今までに開拓を訪れてきた皆さんが不思議だと申される程に、大八洲の女性は、入植の幕舎、暮らしの辛い困った頃から、食事の際、共同作業の休憩の時、婦人達の集まった場合は賑やかに笑いが絶えなかった。人間は疲労や不安がたまると無口で沈みがちになり易いが、東北人は忍耐強いと前から聞いてきたが、山形の県民性と申すか



組合の婦人部が多数参加して開かれた茨城県開拓婦人部親睦会

他県出身の婦人達も感化を受けてか、人前だけや一時的なつくろいでない常に陽気な雰囲気を入植以来変わることなく保ち続けてきたことには驚くほかない。

昭和四十年七月には県下の開拓地では第一号の開拓婦人ホーム（組合事務所兼）を建築して婦人部活動の拠点ができ、これが機会に八月には早速鹿行開拓協議会婦人部一行百五十名が視察研修に訪れたのをはじめ、翌年七月にも県南開拓婦人部の方が見えられて研修、交流会を行った。そして、大八洲婦人部が催す行事の回数も増していった。

婦人部の会員は発足以来この方一世代の婦人で構成してきたが、従来守谷町婦人農業クラブの会員として活動してきた二世代婦人の婦人部参加が最近からはじまったので、若い世代の新しい感覚で部の運営が進められるものと今後の活躍を期待している。